



# 博物館だより

第77号



写真1 家康天海対座図(当館蔵、復元模写本)

# 「家康天海対座図」の紹介

## 1、はじめに

今年(2024)は徳川家康(1542～1616)が没して400年という節目の年にあたります。家康は慶長10年(1605)以降、たびたび鷹狩り等で川越に訪れています。また特に、没した翌年の元和3年(1617)、家康の霊柩が久能山から日光山に移される途中で喜多院に留まり、法要が天海(不明～1643)によって営まれました。このように川越は、天海を介して家康とのゆかりが深い所です。当館の近世展示室では、家康と天海の関係象徴する「家康天海対座図」(復元模写本、当館蔵・寛永寺青龍院旧蔵)を展示していますので、この機会に改めて「家康天海対座図」を紹介します。

## 2、「家康天海対座図」(復元模写本)

当館所蔵の「家康天海対座図」(写真1)は、平成2年の開館にあわせて制作された資料です。当館が本資料を制作するにあたり、寛永寺上臈の浦井正明氏から多大なご尽力を賜りました。こうした経緯から、今回も浦井氏に「家康天海対座図」に関する事をお伺いしました。浦井氏によるとこの原本は、寛永寺子院の青龍院が所蔵していたが、第二次世界大戦末期の昭和20年の東京大空襲によって焼失したと聞いている。寛永寺には原本に関する資料等は一切残っておらず、言い伝えのみが伝わっている。また現在は、原本を観たことのある人はいないということです。この経緯を踏まえると、原本は昭和20年から存在しないということになります。それでは、当館所蔵の「家康天海対座図」がどのようにして制作されたのか、その制作過程をみていきます。

### ・制作過程

原本を知る唯一の資料は、『日本画大成 第六巻』(東方書院発行、昭和7年刊)に掲載されたカラー図版(写真2)のみです。解説もありそこに、「紙本着色、高さ2尺6寸8分、潤さ(広さ)1尺1寸5分(以下略)」と記されています。この記述から原本は紙本着色で、本紙部分は縦812mm×横348mmであったことがわかります。当館は、この『日本画大成 第六巻』に掲載された図版等に基づいて復元制作を行いました。以下にその手順をまとめます。

- ①『日本画大成 第六巻』掲載の「家康天海対座図」(カラー図版、寛永寺青龍院蔵)を撮影し、本紙の実寸大(縦812mm×横348mm)に拡大引伸しをした。
- ②実寸大に拡大引伸しをした写真を基に、本紙部分を模写した。その際、狩野探幽の技法や色使い等を忠実に倣って模写するよう留意した。模写は、日本画家として当時東京文化財研究所で数々の国指定文化財の復元や修復を手がけた故田中穰氏に依頼した。
- ③本紙部分は『日本画大成 第六巻』の通り、紙本着色で原寸大とした。そして本紙に相応しい表装を施し、軸装した。

このように、当館資料は『日本画大成 第六巻』に掲載された図版が基になっており、日本画家田中穰氏の手彩色によって忠実に復元模写されたものといえます。(この一連の作業の中で、故田中氏による模写が重要な役割を担っていたこと

はいうまでもありません。ただ田中氏が故人であるため、模写作業の細かい点を伺うことはできませんでした。)このため今は、当館資料が原本に代わる貴重な写しといえましょう。

## 3、2点の「家康天海対座図」

次に原本について考えてみます。「家康天海対座図」は現在もう1点存在が確認されており、寛永寺青龍院旧蔵資料(以下A本と表記)と異なる図様で描かれています(現寛永寺現龍院蔵、写真3、以下B本と表記)。ここではA本とB本の2点の「家康天海対座図」を紹介し、その考察を行います。

### (1)「家康天海対座図」(寛永寺青龍院旧蔵、A本)

当館資料の原本にあたる「家康天海対座図」(寛永寺青龍院旧蔵、A本)は、前述したように昭和20年まで存在しその年に焼失したことになります。A本は『日本画大成 第六巻』の図版解説によると、寛永寺青龍院法祖の亮盛大僧都が、三代將軍徳川家光から拝領したと記されています(飯塚米雨著)。これが由緒を記した唯一の記述ですが、このことは『徳川実紀』等の他の資料では確認できません。また当時の亮盛の立場等を考慮すると、『日本画大成 第六巻』の解説は不自然であると考えられ、浦井氏もこの点是指摘しておられました。A本の由緒等に関しては、再検討の必要があると考えられます。

次に限界はありますが、『日本画大成 第六巻』図版と当館資料を参考にしながら、A本の特徴を考えてみます。

A本では家康は、東帯姿で正面を向いて描かれています。目を大きく見開き上を視て、威厳に満ちた表情をしています。天海は家康の右斜め下に位置し、左向きで家康と対面する形で描かれています。両者の間には、朱の三つ足台の上に置かれた香炉が描かれています。(写真4)上部には天海による賛が認められ、右下隅には狩野探幽(1602～74)の落款と印章があります。

家康が東帯姿で正面向きで描かれた例はあまり存在せず、多くは左向きで描かれています。正面向きの家康像は、東照大権現靈夢像(「公財」徳川記念財団蔵)2点や徳川家康像(増上寺蔵)の3点程が確認されるのみです。東照大権現靈夢像は、徳川家光(1604～51)が夢の中でみた祖父家康の姿を狩野探幽に描かせたものです。その靈夢像の中で、寛永16～18年(1639～41)頃に制作された家康は、目を大きく見開き神々しく威厳に満ちた表情で描かれていることが指摘されています。A本に描かれた家康(写真6)はこの時期に描かれた靈夢像の家康(写真7)との類似性が認められ、A本は靈夢像が制作された時期(寛永16～18年)前後に制作された可能性も考えられます。

賛は、「陰陽不測 造化無為 弘誓垂仏 護国為心 三国傳灯 大僧正天海(朱文方形印「天海」)(花押)」(大意、陰となり陽となり一定せずおのずから存在する、仏の道を究め、国を護る心をもつ){写真9}とあります。この文言は、天台宗の重要な口伝や山王神道の教説等をまとめた『山家要略記』等から引用したもので、山王権現の本質が記されています。花押は一般的な天海花押とやや異なりますが、天海自筆の賛とすると、A本は天海が没する寛永20年(1643)までに記されたものとなります。

落款と印章は「探幽齋法眼筆(壺型かの糸印)」(写真11・12)とあり、A本は狩野探幽守信が法眼に叙任された寛永15年(1638)以降の作と知られます。

以上のことからA本は、天海が着賛し狩野探幽筆により、寛永15～20年(1638～43)の間(或いは寛永16～18年頃の間)に制作されたものと考えられます。また、賛の文言や場を清めるための香炉が描かれていることから、家康が天海から山王一実神道の奥義を伝授される「秘伝伝授の対面図」と考えられています。

## (2)「家康天海対座図」(延暦寺松禪院旧蔵、B本)

B本は現在寛永寺現龍院が所蔵する「家康天海対座図」で、『徳川家康の肖像－江戸時代の人々の家康観展』図録(「公財」徳川記念財団発行、2012年刊)で既に紹介されています。外箱、内箱、書付があり、外と内箱の箱書や書付から、元々は延暦寺子院の松禪院の所蔵であったことが知られます。紙本着色で、法量は縦1700mm×横420mm、本紙部分は縦900mm×横295mmです。B本の家康と天海が対座する姿は、A本と異なる図様で描かれています。家康は東帯姿で右向きに描かれ、目は大きく見開き、A本程ではないものの威厳に満ちた表情をしています(写真8)。天海は家康の左斜め下に位置し、家康同様に右向きで描かれています。また、両者の間に香炉が描かれていない点もA本と異なっています(写真5)。賛の文言も異なり、「南無東照大権現 三国傳灯大僧正天海(花押)」(写真10)と、家康の神号が記されています。天海の花押は他の史料と比較しても問題なく、浦井氏もこの点は問題ないとの見解でしたので、この花押は天海自筆の花押とされます。

本紙の左下隅には狩野探幽の落款と印章があり、「探幽齋法眼筆(朱文長方印、{探幽齋})」(写真13・14)と記されています。この落款と印章については浦井氏から、榊原悟氏(日本美術史学者、岡崎市美術博物館長)のご教示により探幽の落款と印章で問題ないとの見解であったことを教えていただきました。そのためB本は、探幽によって制作された作品と位置付けられます。

以上のことからB本は、天海が着賛し狩野探幽筆による「家康天海対座図」で、制作時期はA本と同じく、寛永15～20年の間と考えられます。またB本は香炉は描かれていないものの、賛に家康の神号(東照大権現)が記されていることや、家康と天海が対座する図様となっていること等から、B本もA本同様に、家康が天海から山王一実神道の奥義を伝授される「秘伝伝授の対座図」とされます。

つまり、「家康天海対座図」と呼ばれる「秘伝伝授の対座図」はA本とB本の二種類存在し、この2点は共に天海着賛で狩野探幽筆による作品で、2点はほぼ同時期に制作されたと考えられます。2点の内の1点は寛永寺、もう1点は延暦寺と、それぞれ天海とゆかりの深い天台宗寺院に存在していました。

尚この点について浦井氏は、「家康天海対座図」はもう1点あり、天海とゆかりの深い寺院である輪王寺にも存在していたのではないかと指摘されていました。大変興味深い意見であり、その可能性も考えられます。

## 4、おわりに

「家康天海対座図」について、当館資料や『日本画大成 第六卷』図版、当館資料の原本にあたるA本と新たに確認されたB本、各々の紹介を行いました。いま一度整理しますと、「家康天海対座図」は、当館の原本にあたるA本と別の図様のB本の2点あり、それらは共に天海着賛で狩野探幽筆によるもので、ほぼ同時期、つまり寛永15～20年(1638～43)の間に制作されたと考えられること。A本は寛永寺、B本は延暦寺と、2点は天海とゆかりの深い天台宗寺院にかつて存在していたこと。そして、家康が天海から山王一実神道の奥義を伝授される場面を描いた「秘伝伝授の図」とされること。となります。

ではなぜ「家康天海対座図」が寛永15～20年の間に制作されたのか、その目的や背景等を考えてみますが、紙面の都合上この点については、号を改めまして考察する予定です。ただ要点のみ述べますと、寛永10年(1633)以降は徳川家光と天海が、家康は「東照大権現」という神であるという東照大権現祭祀を主導した時期にあたります。「家康天海対座図」は、家康が天海の唱えた山王一実神道に基づく東照大権現となる場面で、家康と「東照大権現」はイコールの関係にあることを具体的に表したものと いえます。さらに天海がこの対座図に描かれているのは、天海は家康が東照大権現となるための仲介者として、重要な役割を担っていたことを意味しているからと考えられます。

このようなことから「家康天海対座図」は、家光と天海が東照大権現祭祀を積極的に進めた事業の一環として制作されたものではないかと考えられます。

当館で展示している「家康天海対座図」は復元模写資料ではありますが、現在は原本が存在しないため、当館資料が原本に代わる貴重な資料といえましょう。家康没後400年という節目の年に、この「家康天海対座図」を観に来ていただければ幸いです。また最初に述べましたが、川越と家康のゆかりの深い年である1617年から400年目にあたる2017年に当館では、家康没後400年を記念する展示等の事業を開催する予定です。その際にはぜひご来館いただければ幸いです。

(学芸担当 井口信久)

### 「付記」

今回の論考にあたり、B本所蔵者である寛永寺上臈の浦井正明氏から多大なご教示、ご協力を賜りました。ここに厚くお礼申し上げます。

### 【参考文献】

- 1『南光坊天海発給文書集』(株)吉川弘文館 2014
- 2『新訂増補國史体系 徳川實紀第三篇』(株)吉川弘文館 1990
- 3『徳川家康神格化への道』曾根原理著 1996
- 4『歴史文化ライブラリー 256 神君家康の誕生－東照宮と権現様－』曾根原理著 2008
- 5『徳川家康の肖像－江戸時代の人々家康観展』展示図録 (公財)徳川記念財団 2012
- 6『日光山輪王寺 第85号』「東照大権現(家康公)と天海大僧正」浦井正明著 2015

写真提供：写真7 (公財)徳川記念財団



写真2 家康天海対座図(『日本画大成 第六巻』[東方書院]のカラー図版より掲載、A本)



写真3 家康天海対座図(寛永寺現龍院蔵、B本)



写真4 A本の家康と天海が対座する部分



写真5 B本の家康と天海が対座する部分



写真6 A本の家康の顔面部分



写真7 東照大権現靈夢像(「公財」徳川記念財団蔵)の家康の顔面部分



写真8 B本の家康の顔面部分

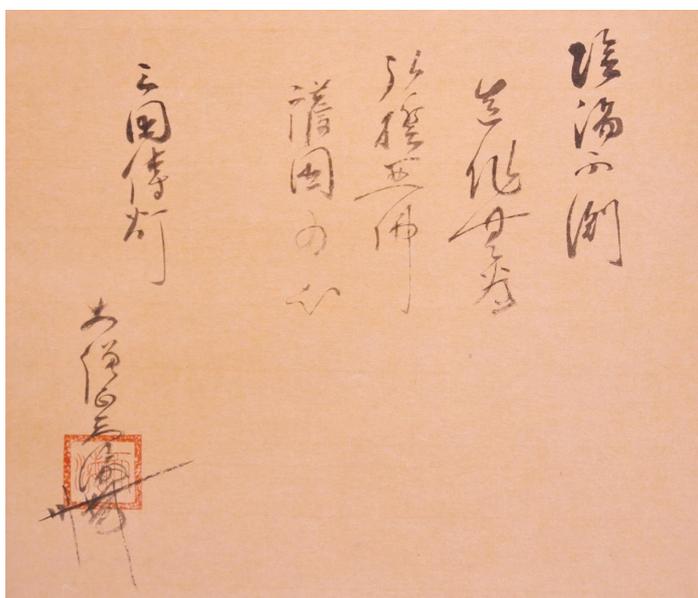


写真9 A本の賛部分



写真10 B本の賛部分



写真11(左) A本の落款・印章部分



写真12(右) A本の印章部分



写真13(左) B本の落款・印章部分



写真14(右) B本の印章部分

# 蔵造りの町並み模型制作物語

— 25年目にして語る その2 —

## 3 製作の話

前号で設計の話をしました。今回は製作についてお話しします。

### ① 製作会社と監理の話

製作は、(株)京都科学東京支店です。契約額は3,800万円。契約期間は、昭和63年11月28日から昭和64年3月25日(契約書の表記)まで、わずか4ヶ月間しかありません。

京都科学と言えば、当時建築模型では、もっとも有名な会社の一つでした。しかし、この模型を見ると、植栽などの背景の造作はちょっと弱い気がします。工房は、西武新宿線の新井薬師前駅から徒歩10分程の所にありました。当時、中心となって製作してくれたのは20代の方、博物館のオープン直後、彼女を連れて見学に来ていたのが印象に残っています。

監修も、設計と同じく太田先生に代表になっていただきましたが、実務は羽生先生以下、私たち4人が行いました。(その1参照)

毎月数回、製作現場に向かい、それまでに出来ている模型が、図面通りであるかチェックをします。最初の頃は、図面の疑問点、模型を造る上での不明点などの打ち合わせです。設計図は、平面図と立面図のみで断面図や詳細図がないため、奥行や凹凸などが表現できていません。そこで、主な建物の断面をその場でスケッチして渡しました。

事前に入念な打ち合わせをした結果、後半は私たちの考え通りに仕上がっているかの確認作業です。

### ② 屋根瓦の話

一番問題になったのは、瓦の寸法でした。製作側からは、直前に請け負った都内某資料館の、100分の1の町並み模型の金型を使えないか、という提案がなされました。早速、その資料館を視察するとともに、実際の部品を手にとって見ました。

しかしそれは、現代の瓦の葺き足だったのです。葺き足とは、重なりを除いた屋根に見えている瓦の縦の長さをいいます。現代の瓦は、だいたい8寸(約24cm)です。しかし、伝統的な建物では約5寸です。その差は3寸(約9cm)、100分の1にすればわずか0.9mmの世界です。でも、屋根の表情がまるっきり変わってしまいます。



「足立屋呉服店」から「山仁」にかけて



「からす」のある「小林佐平」

この模型は、来館者が上から見ることになります。最もよく見えるのは屋根部分。そこで瓦の細部にこだわったのです。

町に出かけたついでに、屋根を見てみましょう。近年の建物と古いお宅の屋根瓦を比較すると、大きさや色の違いに気づくことでしょう。

この模型では、より実物に近づけるため、これまでの他館の模型より黒みを増しています。

### ③ 影盛と棟の話

影盛の大きさは、図面からある程度読み取れるものの、詳細については一棟ごとに指示を出しました。基本的には、大中小の3パターン。それに特大、特殊型を設けました。

まずは、特殊型。たかが模型といっても、実物がある以上、これを再現したものになければなりません。重要文化財大沢家住宅は、大型をベースに板状に薄く仕上げました。「まちかん 宮岡正兵衛」もそのボリューム感に注意を払いました。「小林佐平(現小林家)」では、「からす」と呼ばれる鉄の飾りを付けました。そして、ひも状に仕上げた影盛。実物は、この模型の範囲では「相模屋 小島栄吉(現松崎家)」にしか残っていません。しかし、「山仁 高山仁兵衛(現フカゼン)」や「亀屋 山崎呉服店(現武蔵貨物)」で再現しました。特大のものは、「足立屋 山本平兵衛(現やまわ)」、「松崎徳次郎支店(現松崎スポーツ店)」に採用しました。

棟の形状も、箱棟、印籠付き熨斗積み、熨斗積み、青海波とパターン化し、それぞれ見本品を造ってもらい、一棟毎に指示を出しています。印籠は、細い針金を短く切って並べて表現してくれました。

### ④ 模型の見所の話

この模型の見所は、一つとして同じ建物がないことです。各種資料から敷地ごとの配置の検討、外観の検討、業種に沿った間取りの検討を行い、復原を試みています。皆様に、お店の中をお見せできないのが残念です。

前回も書きましたが、ごく少数ですが奥の土蔵では、規模が同じでかつ開口部を特定できる資料のないものだけ、パターン化したものを建てました。同じ規模でも、敷地の配置状況によって、開口部の位置をずらしたものもあります。



箱棟と印籠付熨斗積み「万文」



青海波

ケース内にある「埼玉県営業便覧(明治35年)」を基にした「営業者職種氏名一覧表」と比較してみましょう。

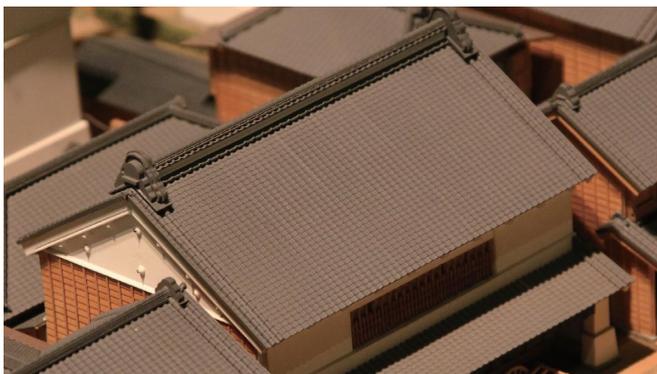
蔵造りと言われる建物の多くが、呉服や太物などの織物関係者であることが分かります。また、集中して建っているのが、南町と多賀町の丁字路や志義町と鍛冶町の丁字路周辺というのも見て取れるでしょう。

今もそうですが、昔も交差点周辺が人のたまり場となり、そこにはおのずと大店が集まったと推測できます。明治の大火の復興の際に、土蔵造りを建てることの出来た豪商達です。

一方、同じ交差点でも札の辻周辺は、蔵造りが少ないですね。本町では大規模な土地所有が多く、表通りには長屋形式の貸店舗が並んでいました。その最たるものが、札の辻の北東の角、平屋のトタン葺きの建物です。川越の草分け町人である榎本家のもので、間口2間半の小規模店舗が6軒も連なっています。

2棟ほど板葺きの町家も建っています。これらは、明治26年(1893)の大火以前の町家の名残でしょう。黒い屋根の家も多く作られていますが、トタン葺です。今から振り返ると、これらも板葺だったかも知れません。なぜなら、わが国では大正時代に、都市では燃えやすい板や茅を屋根に葺くことが禁止され、多くの家ではトタンを上から被せたそうです。我々が入手できた資料からは、トタン葺しか見ることが出来ず、このような屋根にしました。黒いのは、トタンの上にコールタールを塗っていたからです。

あれあれ、大沢家の壁の色が白いですよ。確か、今の建物は黒漆喰のはずなのに。これは、模型の設計をしている時が白漆喰だったからです。昭和46年(1971)に重要文化財に指定され、外壁の修繕が行われました。指定される以前は、軒裏等にわずかですが黒漆喰が残っていたと記憶していますが、模型では、設計当時の状態で図面化しました。その後、平成5年に竣工した半解体修理の際に、黒漆喰に復原されました。



大沢家

#### ⑤ 失敗の話

実は、これだけ様々な資料から復原を試みた模型ですが、後からいくつかの誤りも見つかりました。資料不足だけではなく、私どもの未熟さもあります。

一つは、監理が終盤で行き届かなかったものがあります。先に出た亀屋山崎呉服店の2階の格子です。設計では、亀甲の鉄格子で指示したつもりでしたが、製作者が間違えて普通の木の格子を入れてしまいました。製作の手順上直せない。そこで、外側から真鍮の亀甲格子を取り付けました。よく見ると、亀甲格子の内側に、木の格子が見えますよ。また、数棟ですが、土

蔵の窓の位置がおかしいものもありました。

もう一つは、志義町丁字路に建つ「大塚屋 綾部惣兵衛」の座敷。屋根形状は実際の建物と似ていますが、2階建てを平屋で設計してしまいました。南町から鍛冶町にかけては注意深く調査を進めたのですが、中央通りに現存しているのを見過ごしてしまいました。この建物、今は空き店舗になってしまいました。

さらにもう一つ、札の辻に近い「近江屋 岡常吉」の醸造蔵です。模型ではレンガの煙突が瓦屋根から突き出ています。その後、いくつかの酒蔵の調査をする機会があり、建物からレンガの煙突が出ているのは間違いと気づきました。旧八十五銀行(現埼玉りそな銀行川越支店)から撮った写真に写ったレンガの煙突等、建物の中から出ているように見えました。我が家ので申し訳ありませんが、かつてコールタールが塗られたトタン屋根からブリキの煙突が突き出ていました。その思いこみによる間違いです。個人住宅と工場の煙突はだいぶ違いますよね。

そして、トタン屋根、先ほども書きましたが、今では板葺きだった可能性が高いと思っています。仮に、トタン屋根だとしても、棟の形状がちょっと小さすぎました。トタンで作られた鬼板を持った、小振りな箱棟にすべきでした。

それと今年度になって分かってきたことですが、蔵造り資料館の一番蔵。大正時代頃の建築と推定できるようになってきました。この模型の時代設定では、庭だった可能性があります。



亀屋呉服店

#### 4 おわりに

その後の調査研究等の結果、この模型にはまだまだ至らぬ点が多くあることがわかってきました。

しかし、135軒に及ぶ敷地のすべての建築を資料から研究推測し、模型として表現する。これだけの数を、設計と製作、それぞれわずか4ヶ月間で仕上げています。

ディテールと出来映え、当時町に生きていた方が見ても、不自然さのない仕上がりになったと自負しています。ある方から、「天窓の位置がよく分かりましたね。」と言われたことがあります。「やった一、住んでいる人から認められた。」と思いました。

この模型をじっくり見た後で、今の町並みをもう一度訪れて見ませんか。なにか新しい発見があるかも知れません。

(教育普及担当 荒牧澄多)

## 第25回収藏品展

# 「モノクロームの追憶－当館所蔵の古写真とカメラ」

会期：平成28年3月26日(土)～5月8日(日)

携帯電話にカメラ機能がついて15年。その普及によって、多くの人が日常的にカメラを持つようになり、だれでも容易に高精細なカラー画像を得られるようになりました。しかし、ほんの半世紀前にはまだまだ白黒写真が主流で、プロアマ問わず愛好されていました。白と黒の濃淡のみで表わされた写真は、撮影者の目に留まった情景を、カラー写真にはない情感や空気、ぬくもりとともに、現在に伝えています。カラーフィルムが発売されて70年余。今日ではフィルムさえ用いないデジタルカメラが主流になりましたが、先進の技術の結晶であるデジカメのなかにはモノクロモードがついているものもあります。



旧川越町役場

今回の収藏品展は、これまで市民の皆さんからご寄贈いただいた収藏品のうち、白黒写真とカメラを中心に展示を行います。白黒写真に焼き付けられた過ぎ去った日々や今は見ることのできない風景は、21世紀を生きる私たちに何を伝えてくれるのでしょうか。

### レトロな記念写真はいかが？

《STUDIO 'たいむすりっぷ'》

本展覧会開催中は、会場内を自由に写真撮影ができます。また、会場内に2カ所大きな写真を背景に記念撮影できるポイントSTUDIO'たいむすりっぷ'を設けます。みなさまのカメラで、モノクロの風景をバックにレトロな記念写真はいかがですか？

### 関連事業 「町なかフォトある記」

地元在住の写真家を講師に招き、デジタルカメラを使った写真教室を行います。

- 平成28年4月17日(日) 午前10時～午後3時30分
- 定員15名
- 申込：往復はがきに氏名・年齢・住所・電話番号を記入のうえ、4月8日(金) 必着。

## 利用の御案内

### ◆入館料

区分	博物館	川越城本丸御殿	川越市蔵造り資料館	共通入館(観覧)券			
				●博物館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●本丸御殿 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	100円 (80円)	300円	300円	450円	650円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	50円 (40円)	150円	150円	220円	450円

※( )内料金は、団体(20名以上、1名につき)の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)  
第4金曜日(休日を除く) 年末年始(12月29日～1月3日)  
館内消毒(6月下旬) 特別整理期間(12月下旬)

\*開館時間・休館日は、博物館・川越城本丸御殿・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館)

### ◆交通案内

- 東武東上線・JR川越線 川越駅よりまたは西武新宿線 本川越駅より、
- 東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス停下車徒歩10分、または「小江戸名所めぐり」乗車博物館前バス停下車徒歩0分
  - イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分
- ※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



平成28年 4月

日	月	火	水	木	金	土
						1
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30

5月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

6月

日	月	火	水	木	金	土
						1
5	6	7	8	9	10	11
12	13	14	15	16	17	18
19	20	21	22	23	24	25
26	27	28	29	30		

7月

日	月	火	水	木	金	土
						1
3	4	5	6	7	8	9
10	11	12	13	14	15	16
17	18	19	20	21	22	23
24	25	26	27	28	29	30
31						

- 印は、3館休館(博物館、資料館、本丸御殿)
- 印は、1館休館(博物館)

### 博物館の最新情報をパソコン又は携帯電話へ配信します

メール配信を希望される方は、川越市ホームページのオンライン「メール配信サービス」から「博物館メール配信」の登録を行ってください。携帯電話では、右のQRコードから登録の手続きができます。随時最新の情報等を配信します。  
※登録料および情報提供料は無料ですが、インターネット接続やメールの受信などにかかる費用は利用者の負担となります。



発行日●平成28年3月31日 発行●川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1  
Eメール hakubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

TEL049-222-5399 FAX049-222-5396  
ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/